シーワールドのアニマル達

◎ クジラのロデオ

ロデオ Rodeo とはカウボーイたちが、荒馬や荒牛を乗りこなすなどのわざを競う会（広辞苑より）のことですが、アメリカの水族館で行なわれているシャチによる豪快なショーからヒントを得て私達は荒馬ならぬ荒鯨乗りに挑戦しようという考えが出て来ました。当館では今までシャチの背中に乗りプールを1周するシャチ乗りや、イルカ2頭による水上スキー等ロデオに類似するようなショーは行なってきましたが、昨年春に時機到来とばかりにロデオを調教してみようという気運が盛り上りました。その白羽の矢に当てられたのが、シャチと同じゴンドウクジラ科に属すオキゴンドウのレオ君です。レオ君は昭和45年12月に伊豆の富戸で捕獲された今年で飼育9年目を迎える大ベテランで、体長3.84m、体重は595kgもあります。これまでに調教された芸は約30種類にも及び、主なものとしては鯨乗り、サーフィン、スピンジャンプ、水平ジャンプ等で、昨年3月よりクジラショーとして、お客様の人気を博しております。このように多芸であり、体力のあるレオ君はロデオを行なうには最適の動物であったわけです。さて、いよいよ訓練が開始されると、レオ君も人間を乗せてジャンプするのですから、その大変なことは想像以上で、またトレーナもレオ君の首にかけた輪にしがみつき、水深3mのプールの底まで潜ったり、あるいは2m以上のジャンプをする際の衝撃も相当なものです。ロデオを行なう5人のトレーナーは、水泳は勿論のこと潜水も達者でなければつとまらず、レオ君同様に相当な体力の持主ばかりです。一つの芸を完成させるまでには色々な段階があり、特に新しい芸は試行錯誤の連続です。ロデオも数ヶ月かけて完成させたもので、当館の夏のショーに欠かすことが出来ない素晴らしい芸であり、また、これだけ騒がれ、かつ人気のある芸も当館では初めてです。それだけに、レオ君には今後も元気で頑張ってもらいたいものですし、また同じオキゴンドウのレナちゃん（飼育2年、雌、体長3.68m、体重460kg）も、目下訓練中で、いづれレオ君と一緒にダイナミックなクジラショーを行ないたいと考えております。

（大島記）

◎ 友の会の皆様へのお知らせ

1. 昭和48年の友の会発足いらい、機関誌"さかまた"を発行致し、月1回（最終土曜日）の例会にご出席いただいた会員にお渡ししておりましたが、今後は発行され次第会員全員に郵送させていただく事になりましたので、綴じて大事に保管して下さい。なお、1号から前号までお持ちでない会員は事務局までお申し出下さい。
2. 鴨川シーワールド発行の機関誌"さかまた"と友の会の機関誌"さかまた"の間に発行号数のずれが生じているため整理の都合上、今回シーワールド発行機関誌発行号数に統一することといたしましたので御了承下さい。

さかまた No14.

（禁無断転載）

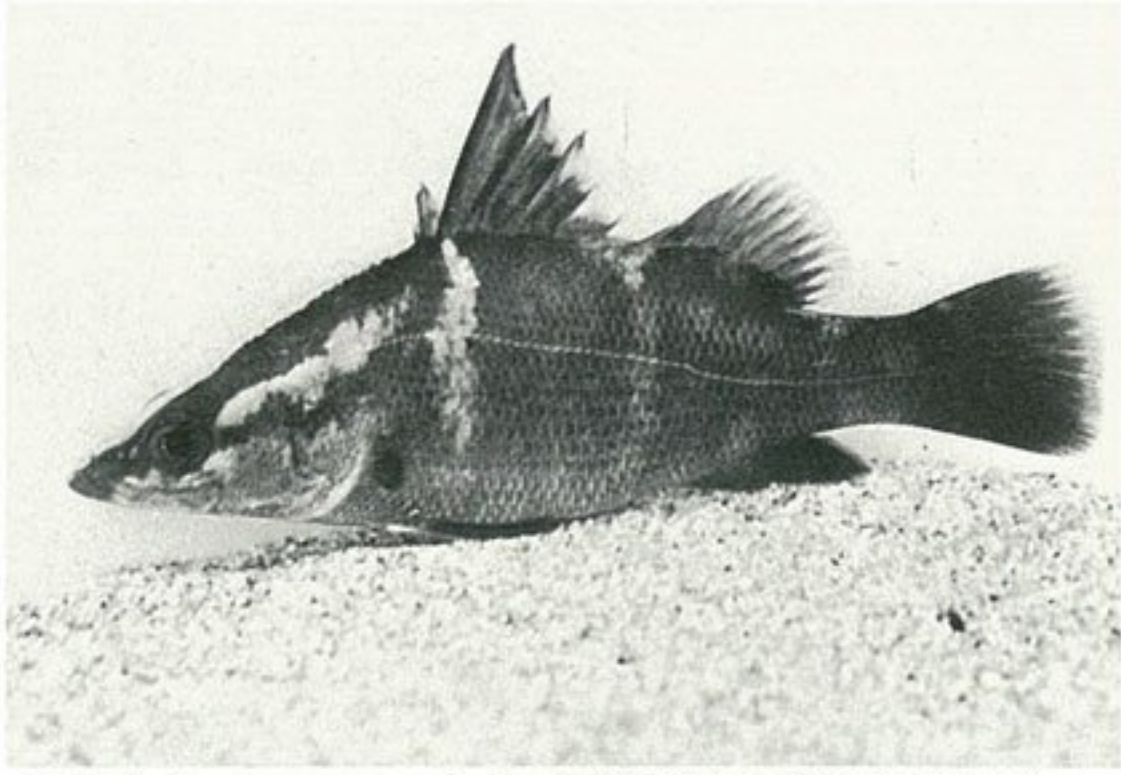
編集・発行　鴨川シーワールド

〒296 千葉県鴨川市東町1464－18

☎ 04709（2）2121

発行日　昭和54年10月

さかまた

鴨川シーワールド　生物の豆辞典　1979・9－No.14

・アカメ *Psammoperca waigiensis* (Cuvier et Valenciennes)

◎ 魚の名前

魚の名前は同じ魚でも所によって違った呼び方をしたり、種類の違う魚を同じ名前で呼ぶことがしばしばあり、このためによく勘違いをすることがあります。こうした混乱をなくすため学問の世界では、世界中のどの国でも判るような共通の名前として学名を使っています。学名は1758年にスェーデンの著名な生物学者、リンネによって定められた、二名式命名法と呼ばれる国際的な方法を使って、ラテン語で呼ばれています。たとえばウナギのラテン語読みは*Anguilla*で世界に16種類知られております。日本や日本近海に棲んでいるウナギは日本産のウナギという意味の*Anguilla japonica* Temmenck et Schlegel が使われています。しかし、ラテン語を言葉の源とする欧米諸国と異り、言葉が全く違う日本では、ラテン語は覚えにくく、判らないため、一般には和名を使っています。

和名は東京魚市場で使用している名前、もしくは産地での地方名を参考にして決めたものです。また食生活に直接関係のない魚種や最近見つかったような魚種でも、ほとんど全ての魚に対して和名がつけられており、標準和名とか和学名などとも呼ばれていますが、あくまでも国内で使われる標準名であって学名ではありません。

ここで、いろいろの魚の名前について調べてみましょう。

……二つの種に同じ和名がついている例……

(1)アカメ *Psammoprca waigiensis* (Cuvier et Valenciennes) (2)アカメ *Liza akame* Tanaka があります。(1)のアカメはスズキ科の魚で(写真参照)宮崎県と高知県の河をさかのぼって来る魚ですが、この魚にまつわる伝説として、皆さんがごぞんじの海幸彦山幸彦のお話があります。山幸彦が兄の海幸彦と狩漁の道具を取り替え漁に行き、アカメという魚に釣鉤を取られてしまい、龍宮に行って釣鉤を取りもどし、三年後に帰るというお話です。(2)アカメは、(1)と全く異るボラの仲間で前記のアカメとの混乱をさけるためアカメボラと呼ぶ方が良いと研究者の中では言われています。

……地方による名前の違い……

和名以外に各地には地方名(方言)がありますが、この中でも一番地方名が多い魚はメダカで、その呼び名2600を数えることができます。

地方名のないものの代表はマダイです。古来タイは海産魚の最上のものとして、目出度い席にはなくてはならない重要な魚なので、地方名がなく幼名、名物としての産地名、品質に関する名前、伝説による名前、季節によって違う呼び名などがあるだけです。ちなみにマダイにあやかってタイの仲間でもないのにタイの名前がつけられて呼ばれている魚は非常に多く、和名だけでも200種類以上の魚につけられています。

……季節によって呼名の違う魚……

地方名(方言)の他に、生活に直接結びついている重要な魚は、季節による魚の味の変化などによっても名前が区別されています。季節によって呼名の違うことで有名な魚にはマダイがあります。このマダイは、桜の咲く四月頃の産卵前の美しく美味なものをサクラダイと呼び、ムギが色づく六月頃の産卵後の不味なものをムギワラダイと呼びわけています。

……体長によって呼名の違う魚……

魚類の年令によって別々の名前がつけられている例もあります。マイワシでは、12cm以下を小羽、または小羽イワシ、12cmから18cmを中羽、または中羽イワシ、18cm以上を大羽、または大羽イワシと呼び、マグロでは、50cm内外をメジ、またはメジマグロ1.5m以上をマグロ、著しく大きいものをシビ、またはシビマグロと呼んでいます。

次は、成長するに従って名前の変わる出世魚と呼ばれている魚の例を東京附近での呼び方で挙げてみましょう。

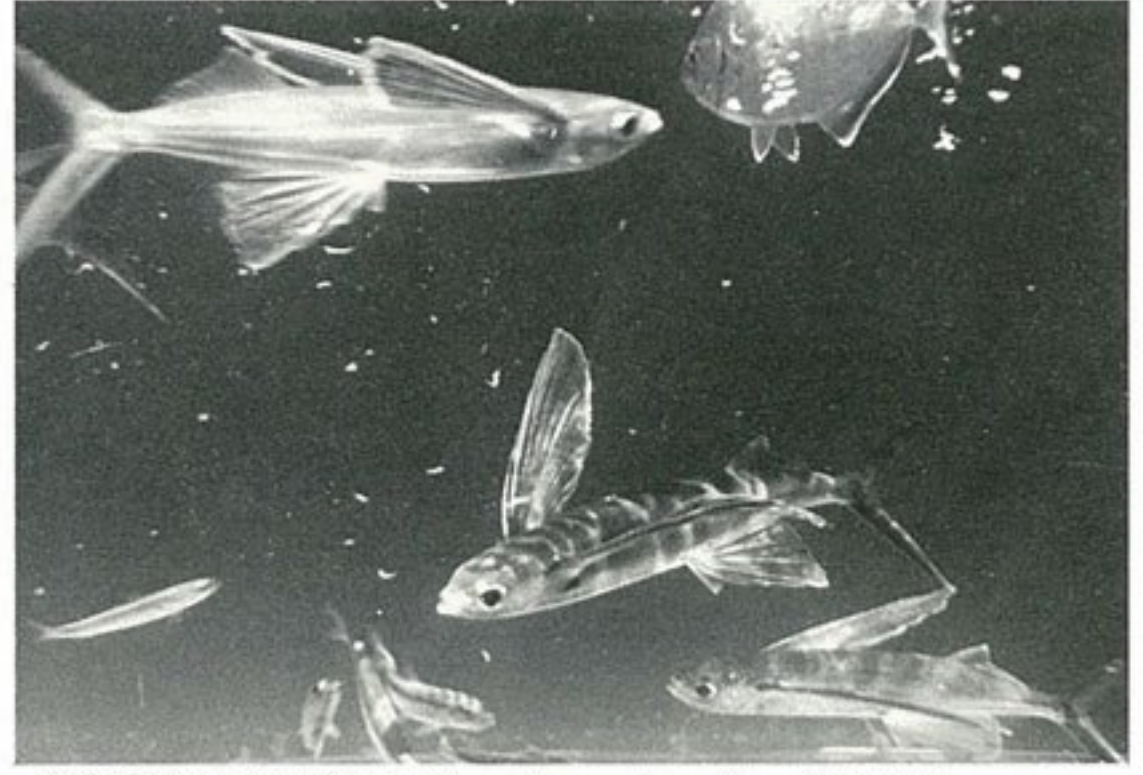
スズキは、10cm位までをコッパ、またはデキ、25cm位をセイゴ、35cm位をフッコ、50cm以上をスズキ、1mから1.5mをオオタロオと呼びます。

ブリでは、10cmから20cmをワカシ、ワカナ、ワカナゴと呼び、30cmから40cmをイナダ、50cmから60cmをワラサ、80cm以上をブリと呼びます。

……魚偏の漢字について……

鮨屋さんに行くと、魚の名前が全部漢字で書いてある所があります。魚偏の漢字を或る辞典で調べてみましたら、全部で674文字もありました。しかし、当用漢字として認められているのは鯨と鮮の2文字だけです。魚偏に京と書いてクジラですが、京は兆の一万倍という数を表わす単位で、とてつもなく、大きな魚という意味で、この漢字が使われています。鮮は美しいという字の元字である羊を魚偏と一緒にして、あたらしいという意味をもたせています。

さて、鱻の字は何と読むかごぞんじですか？読み方はセン、あたらしい意味では新鮮な魚です。魚3っに続いて魚2つの䲆の字は？　読み方はギョ、ゴ、意味は、1)魚がつらなりゆく、2)大きな魚ということです。では魚が横に2つ並んだ䲜の字は？、読み方はセン、意味は不明です。続いて魚4つの𩺰の字は？、読み方はゲフ、ゴフ、意味は魚がさかんなさま、この漢字は魚偏の最後の674文字目の文字となっていました。

以上、魚の名前について簡単に説明してきましたが、四方を海に囲まれた水産国日本ならではの、魚を愛した祖先の作りだした魚の名前には、思わず魚の前で呼んで見たくなるような名が多いのに驚ろかされます。　(榊原記)

・飼育中のハマトビウオ *Cypselurus japonicus* (Franz)

トピックス

◎ 海のグライダー トビウオ

世界中の暖かい海に住む外洋性表層魚のトビウオは、空中を飛ぶことで知られており、日本の近海だけでも25種類以上も見られます。トビウオは大きな胸びれを広げてグライダーのように滑空しますが、その滑空距離は100mから400mで、ずば抜けた滑空力をそなえています。

この空飛ぶ魚を何んとか展示しようと、今までに何度か飼育を試みてきました。しかし展示水槽に入れると他の魚に驚いたり、ちょっとしたショックで水槽のガラス面に激突して死んでしまうことがあって、うまくいきませんでした。そこで今年は水槽の回りにビニールフェンスを張り、水面におおいを掛けた所で1ヶ月間ほど慣らしてみることにしました。その結果、7月7日には同じ外洋性の魚で、動きがゆっくりとしているマンボウと同じ水槽に展示することができました。初めは水槽から飛び出してしまうことが心配されましたが、思いの他のんびりとしていて、優雅な姿を披露しています。　(小坂記)